

創刊のことば

北海道女子大学

学 長 渡 邊 進

今年の冬は世相を反映してか乱調子の天気が続いた。しかし平成9年4月介護福祉・生活福祉の2学科で人間福祉学部を編成し、北海道女子大学が発足してから順調に推移して、早くも1年を経過しようとしている。

恐らくこれから大きく変遷するであろう教育界の動きに対応して浅井学園の新機構の受け皿としての役割が求められていると考えると、責任の重さを感じざるを得ない。

しかしいまは大学創設の時期でもあり、各種の方針を決定するなどの用務が山積しているが、この度その一つとして関係者の協議の結果、大学の紀要“人間福祉研究”の創刊をみたことはまことに喜ばしいことである。

私は特に大学における研究は、大学の重要機能であり、ステータスシンボルとしての大きな役割を持っていると考えている。昨今学部は学生指導に中心をおき、研究は大学院で行うなどの意見もあるが、学部には学部としての研究があり、研究をつみ重ねてはじめて充実した学生教育に結びつくと考えている。特にこのような混乱の時だからこそ、何が大学教育の理念であるかを明確にわきまえ、学生に何を学ぶべきかを誤りなく伝えて行きたいものである。

さて社会事情を観察していると、従来の価値体系が大きくゆらぎ、不安と不信の空気が強く表面化しているが、一面において各種研究分野では、きわめて活発に成果を重ねているように見受けられる。特に“福祉”は古くて新しい課題であり広範囲にわたっているために、一つ一つがさらに細分化し、各部門が大きく育っているようである。このことは同時に“発展の原理”から考えても細分化から統合に、そして再び細分化をくり返して行く経過となるであろう。

あわただしく不安定な世相であるからこそ、経済や政治や諸々の社会現象は脇において、しっかりと腰をすえて変ることのない真実を求めて研究に“学び”を求めているともいえる。

いわゆる学会誌とは異なった気楽な発表の場が広がったことを歓迎するとともに、これがさらに大学の活性化に大きく結びつくことを期待している。